

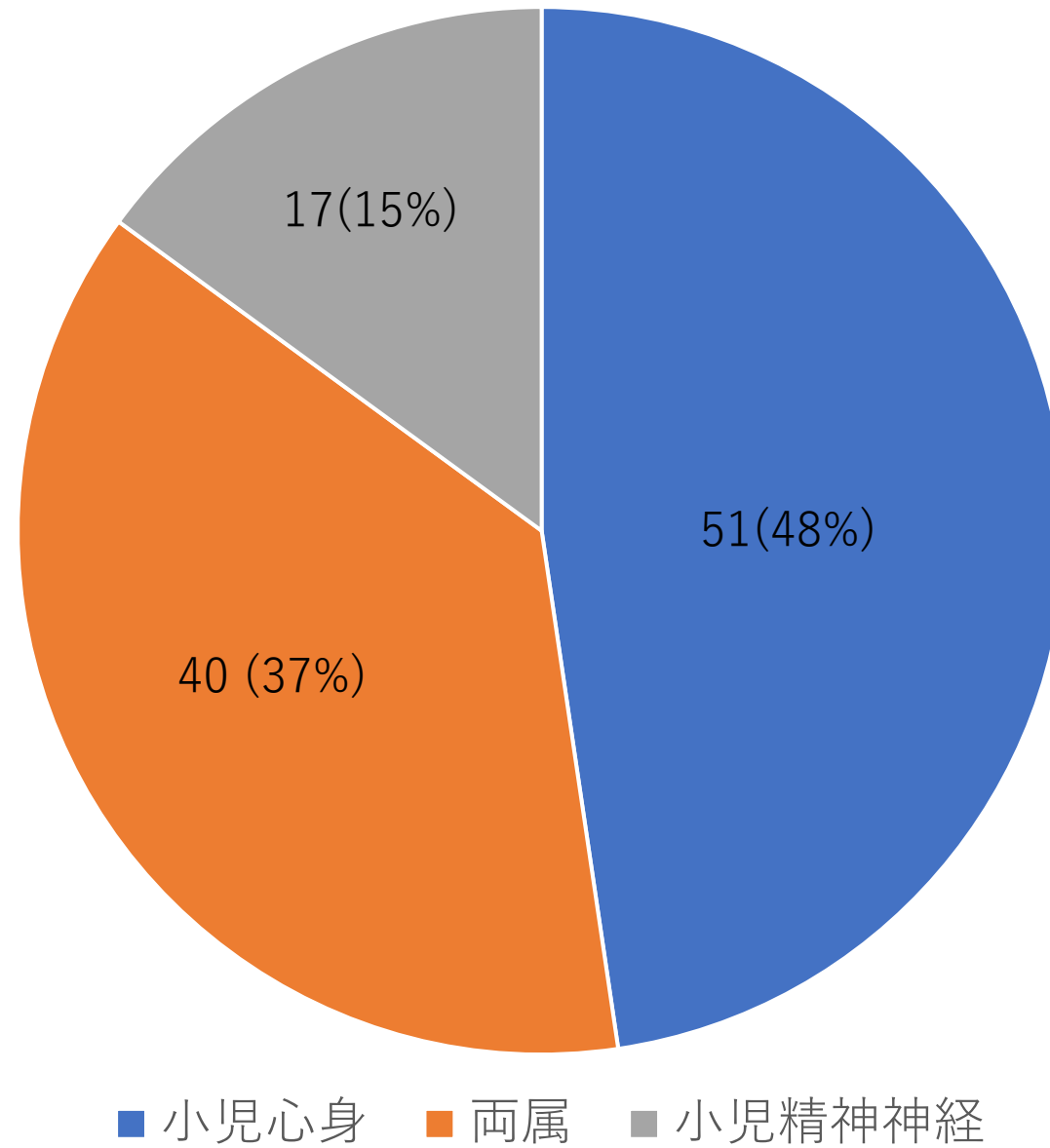
2023年10月  
日本小児心身医学会・日本小児精神神経学会  
小児特定疾患カウンセリング料算定に関する  
診療実態の合同調査

小児心身医学会保険委員会  
小児精神神経学会社会保険委員会  
小児科学会社会保険委員会

# 対象と方法

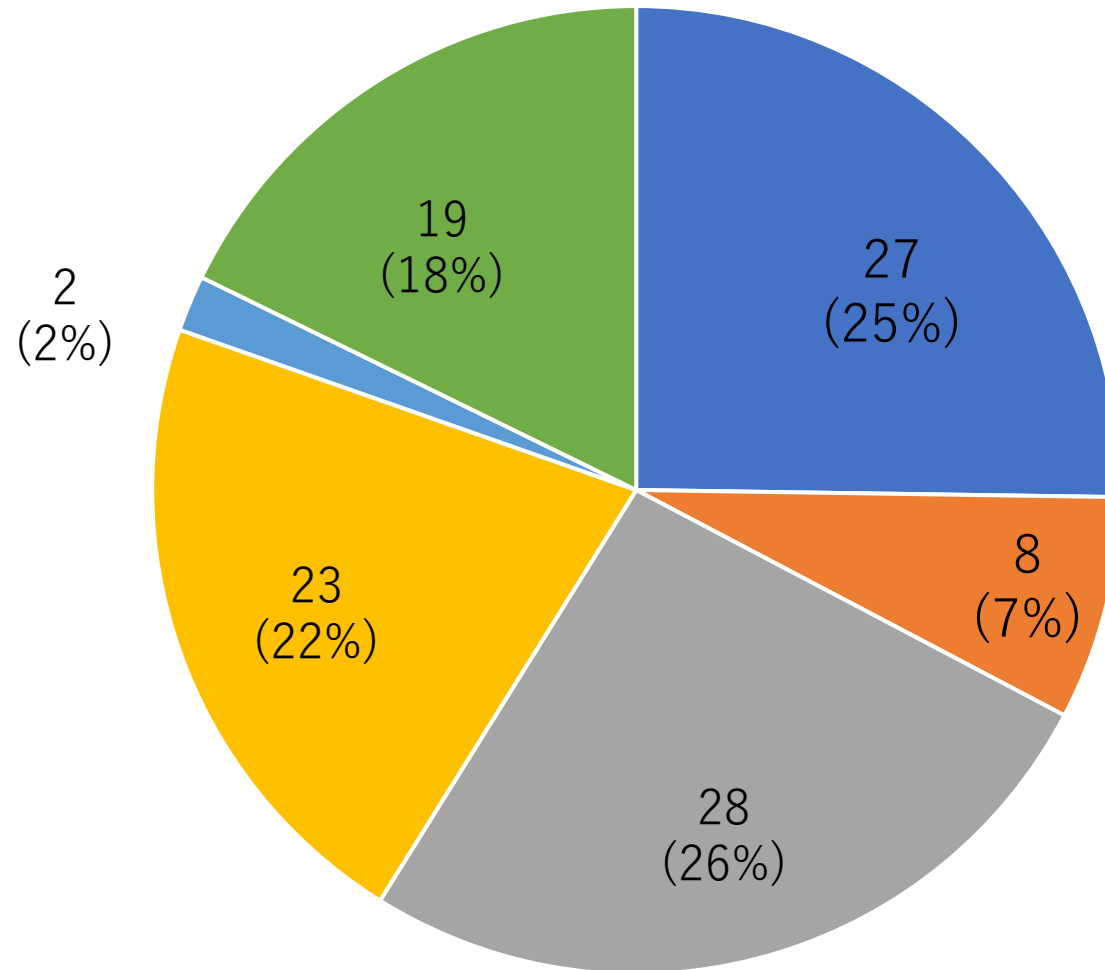
- 2学会合同の代議員調査（小児科学会は技術協力者として参加）
- 調査期間：2023年10月13日～2023年10月15日の3日間
- 代議員の2学会重複を省き、原則として1施設1回答で依頼
- 小児特定カウンセリング料算定に関わる小児科の代議員に限り、回答を依頼（精神科医は対象外）
- Googleフォームを用いた質問紙調査
- 対象数 135名 うち111名(82%)から回答を得た  
このうち、期日内に回答できた107名を解析対象とした

# 代議員所屬



N=107

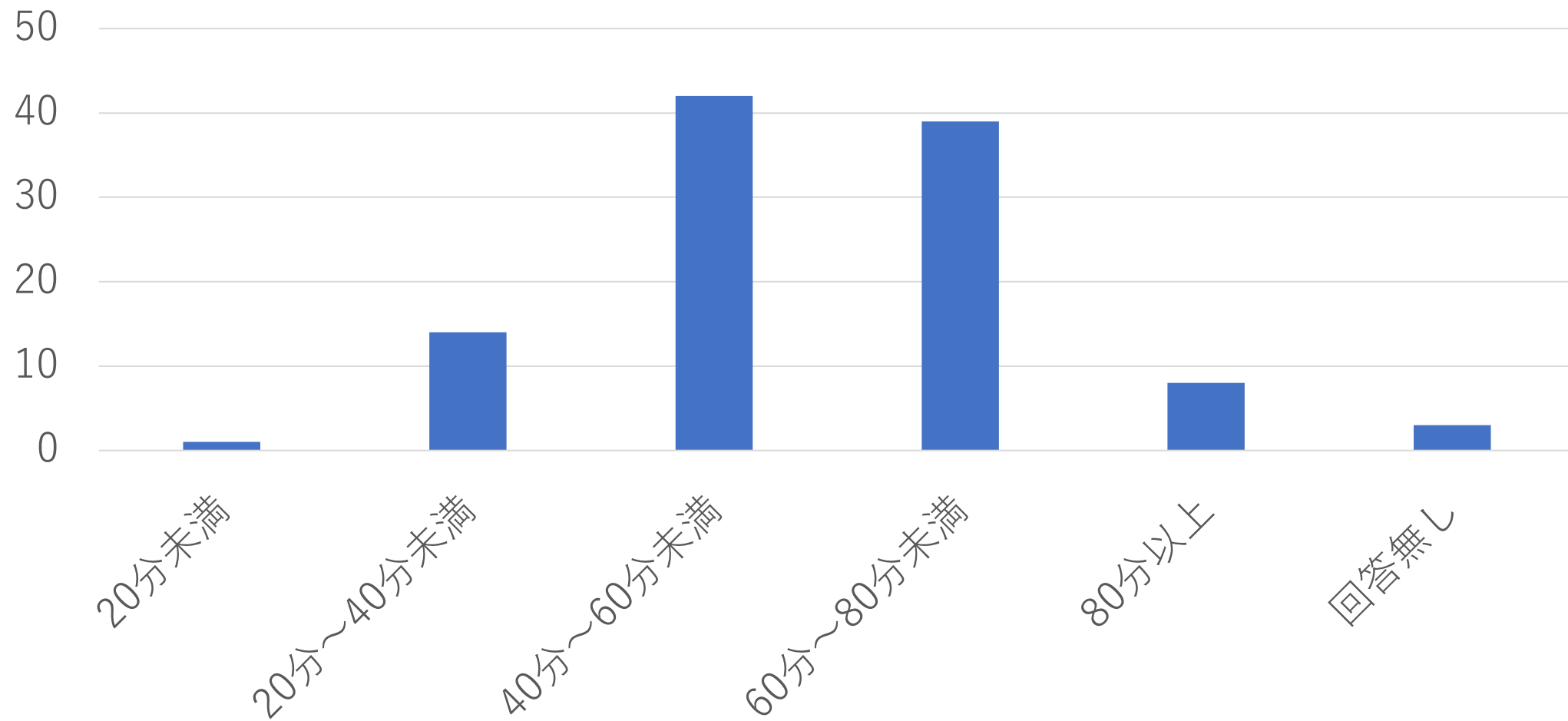
# 所属施設区分



- 大学病院
- 小児病院
- その他の病院・療育センター
- 診療所
- その他、非常勤など
- 記載なし

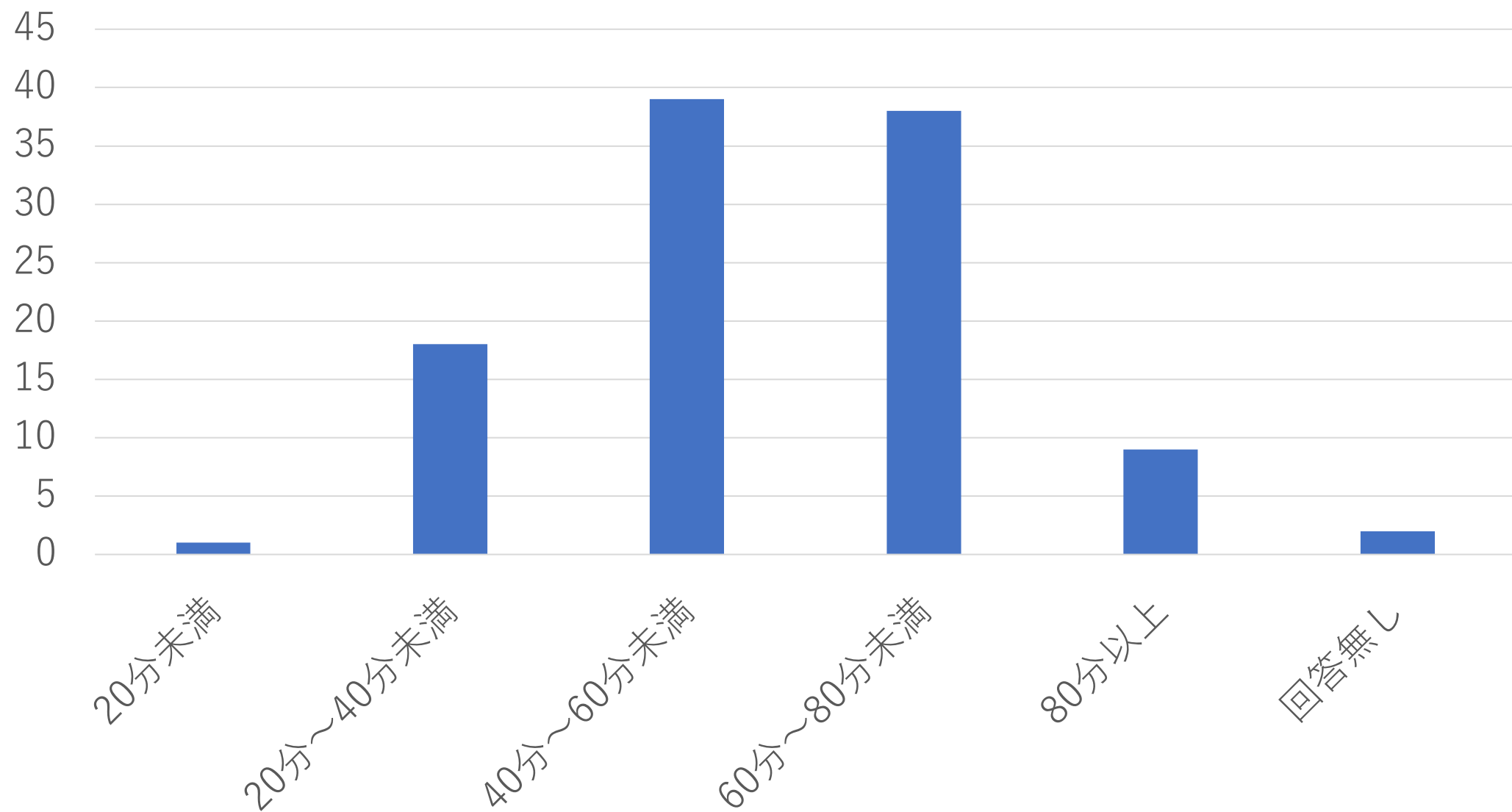
N=107

# 初診所要時間 心身症



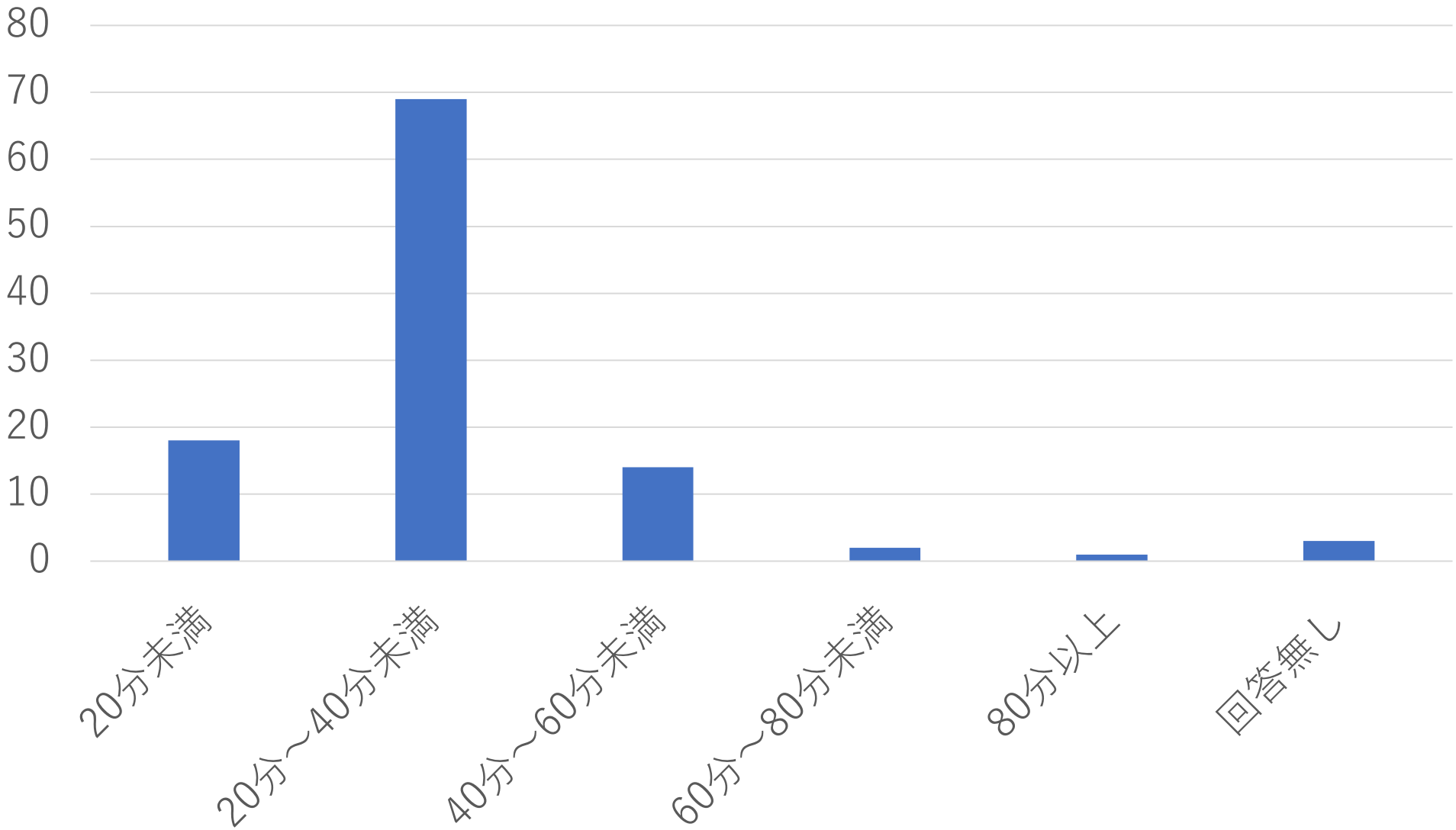
N=107

# 初診所要時間 神経発達症

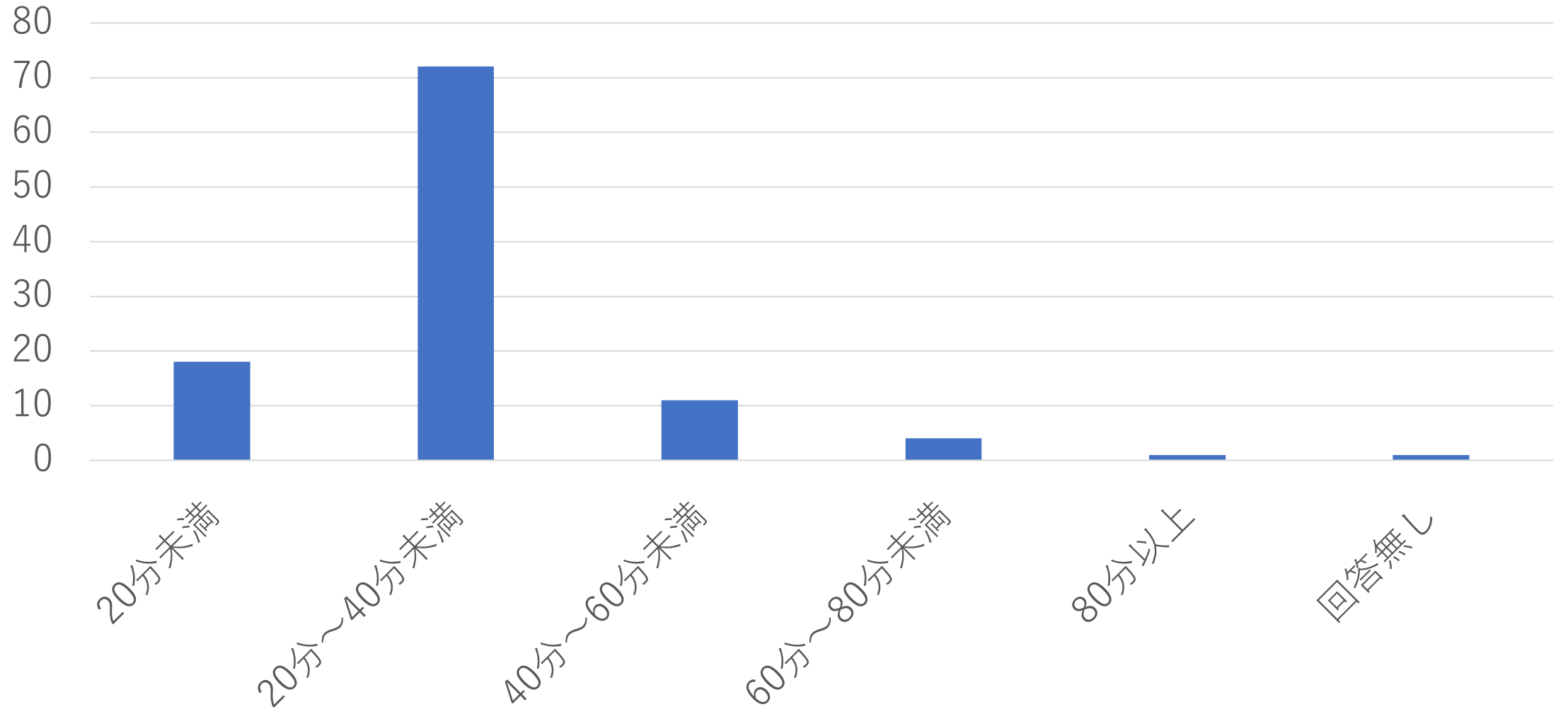


N=107

# 再診所要時間 心身症



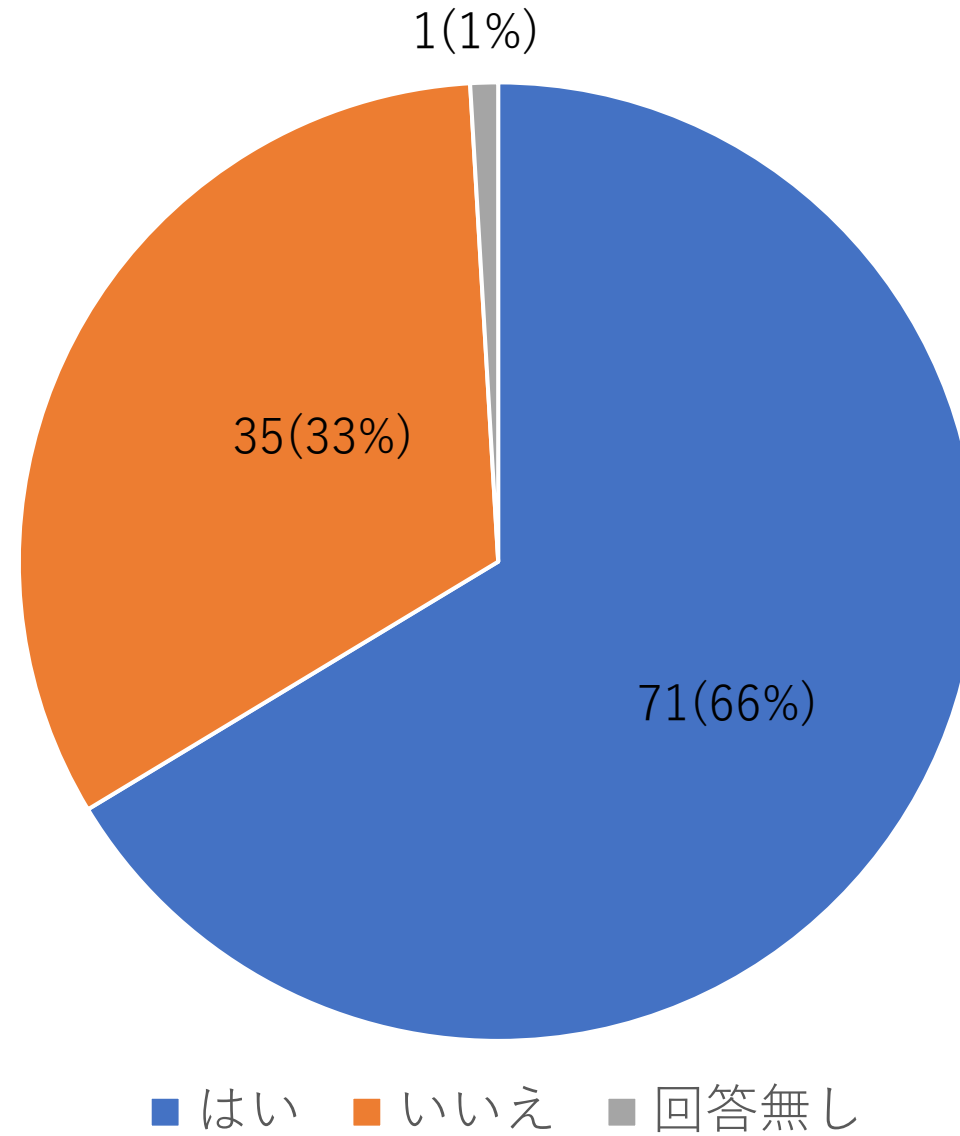
# 再診所要時間 神経発達症



N=107

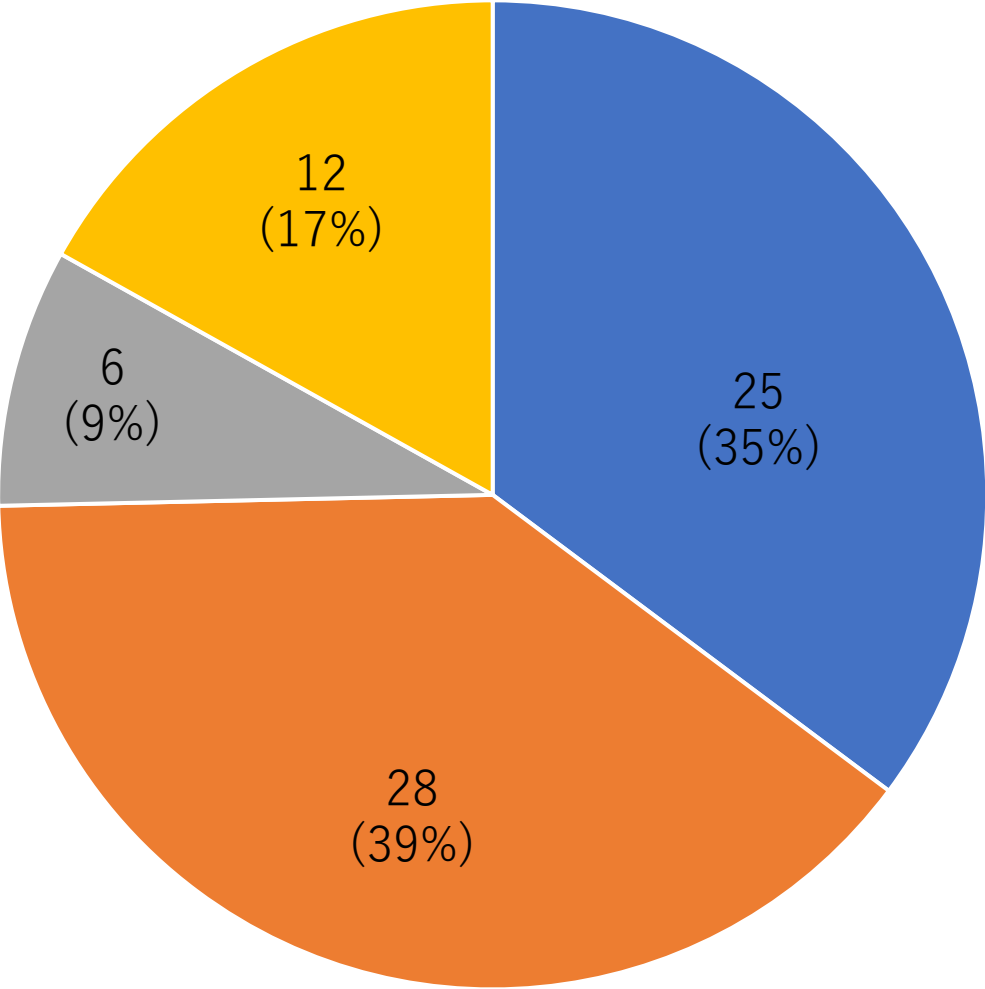


あなたの所属施設は多職種配置（PSW、OT、CP等）を実施していますか。



N=107

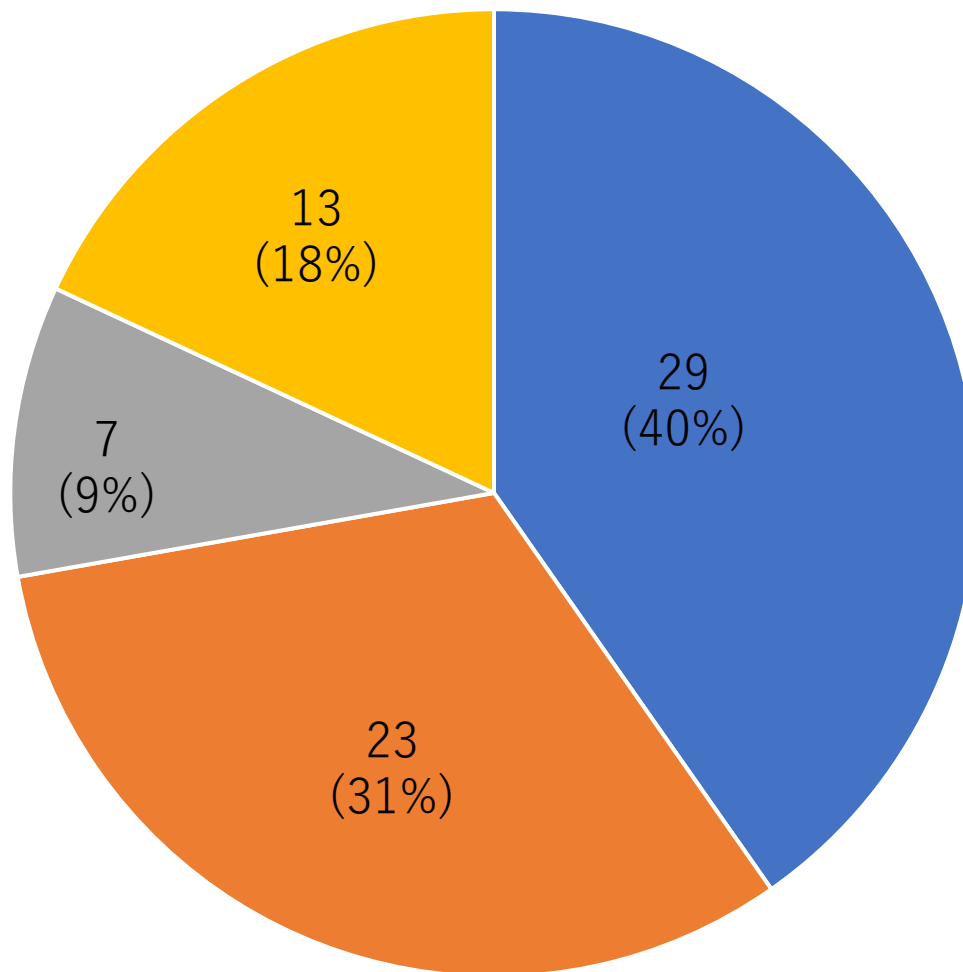
# 多職種配置は1日あたり多くの再診患者を診察できるか



■ はい   ■ どちらかというとはい   ■ どちらかというといいえ   ■ いいえ

N=71(多職種配置あり)

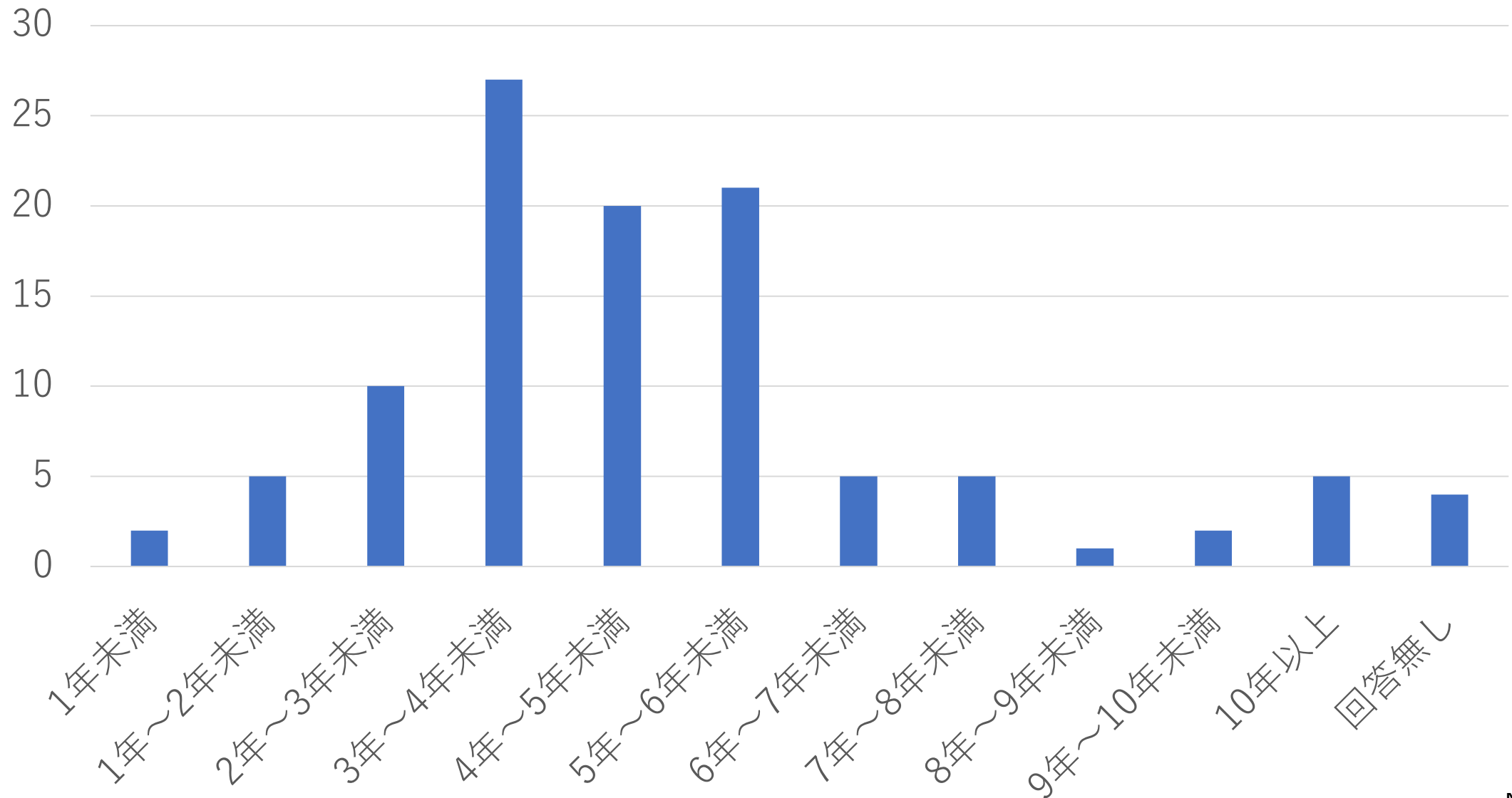
# 多職種配置は医師の診察時間を短縮できるか



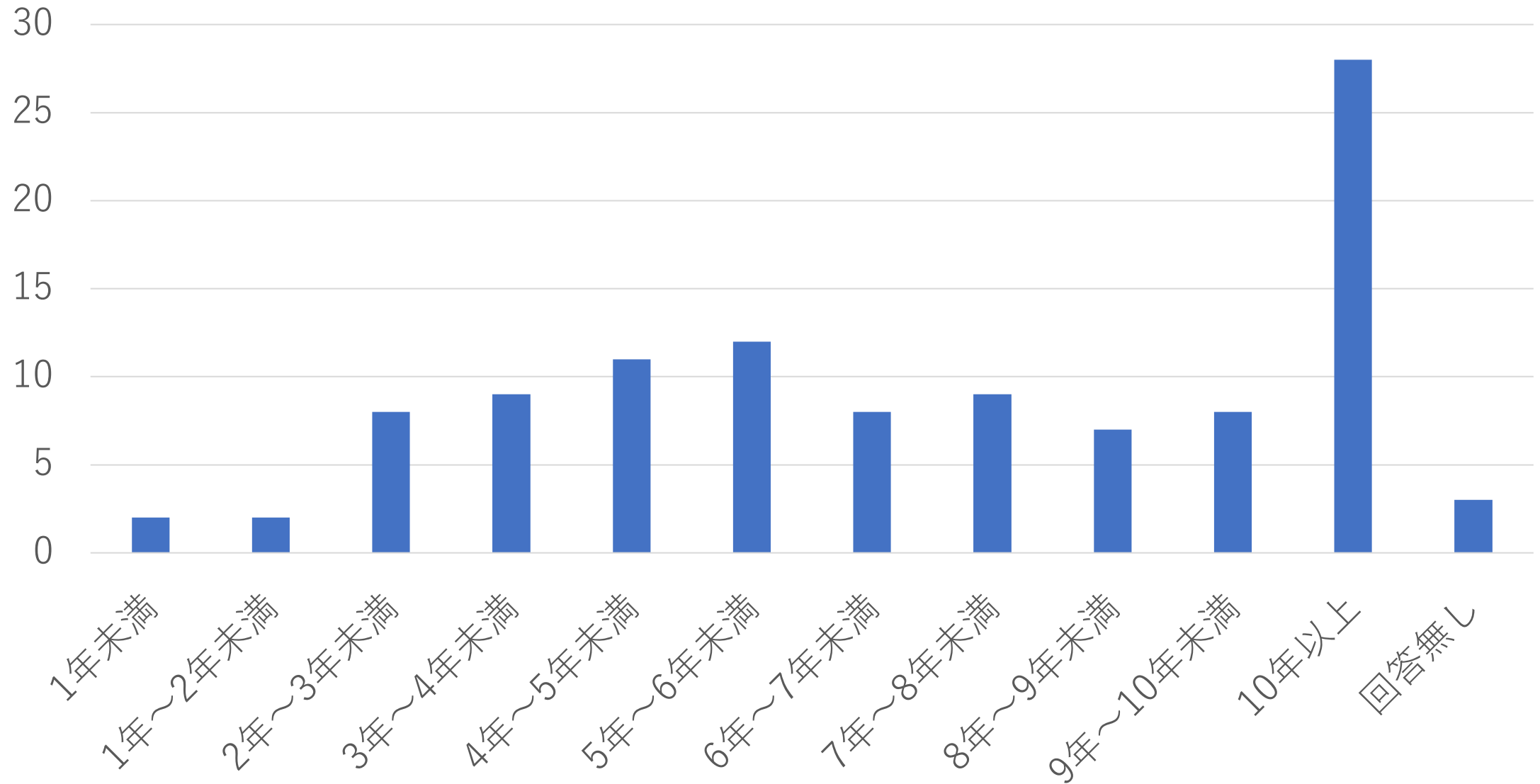
■ はい ■ どちらかというとはい ■ どちらかというといいえ ■ いいえ

N=72(多職種配置あり)

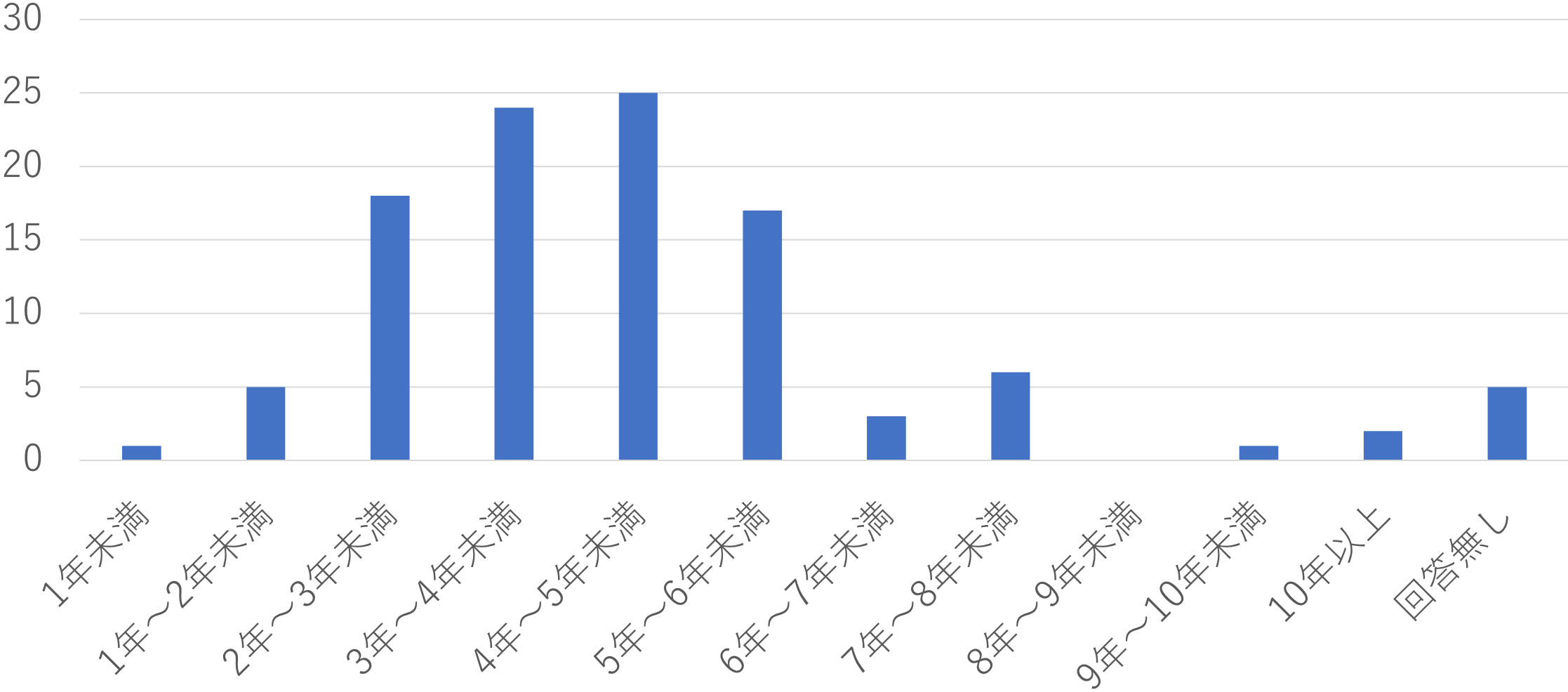
# 平均診療期間 心身症



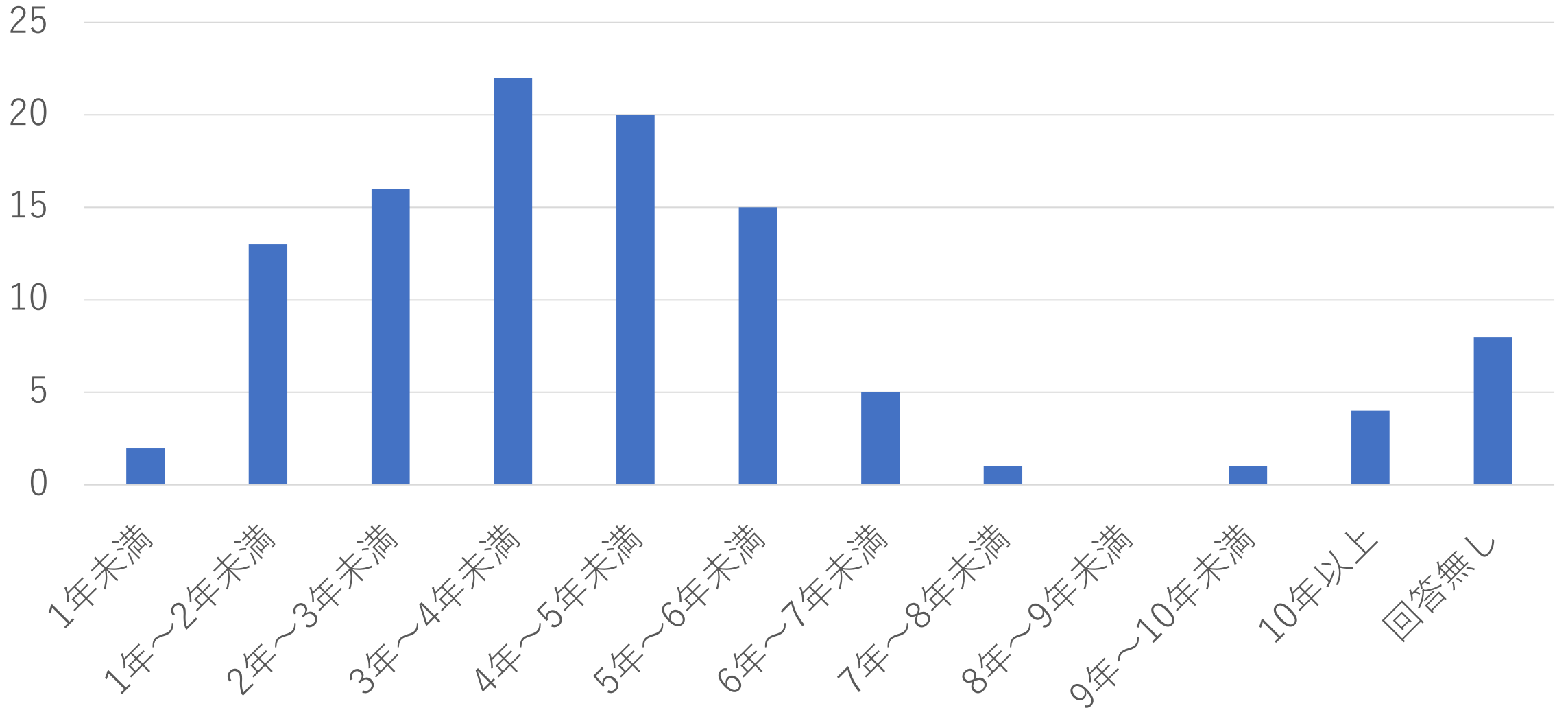
# 平均診療期間 神経発達症



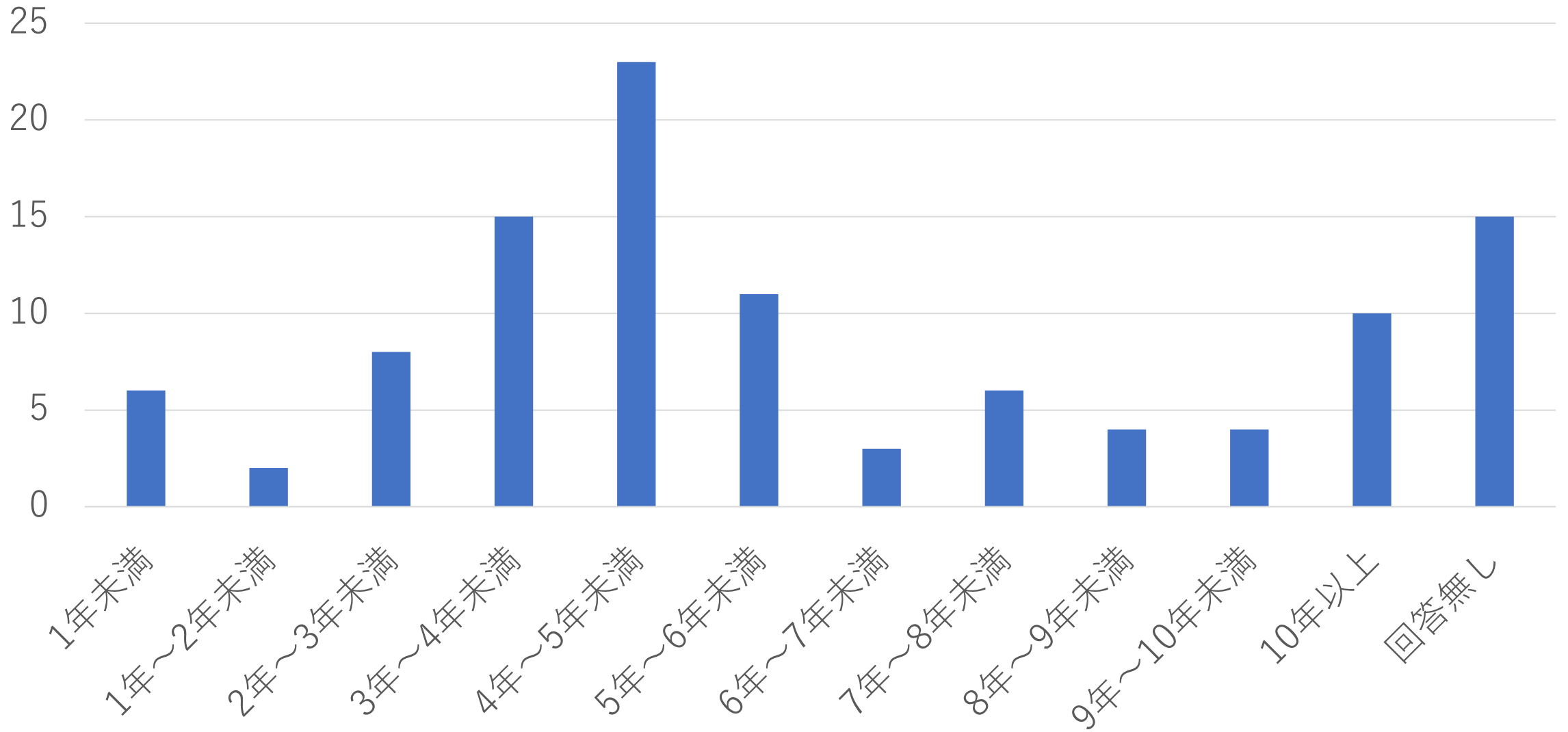
# 平均診療期間 起立性調節障害



# 平均診療期間 過敏性腸症候群

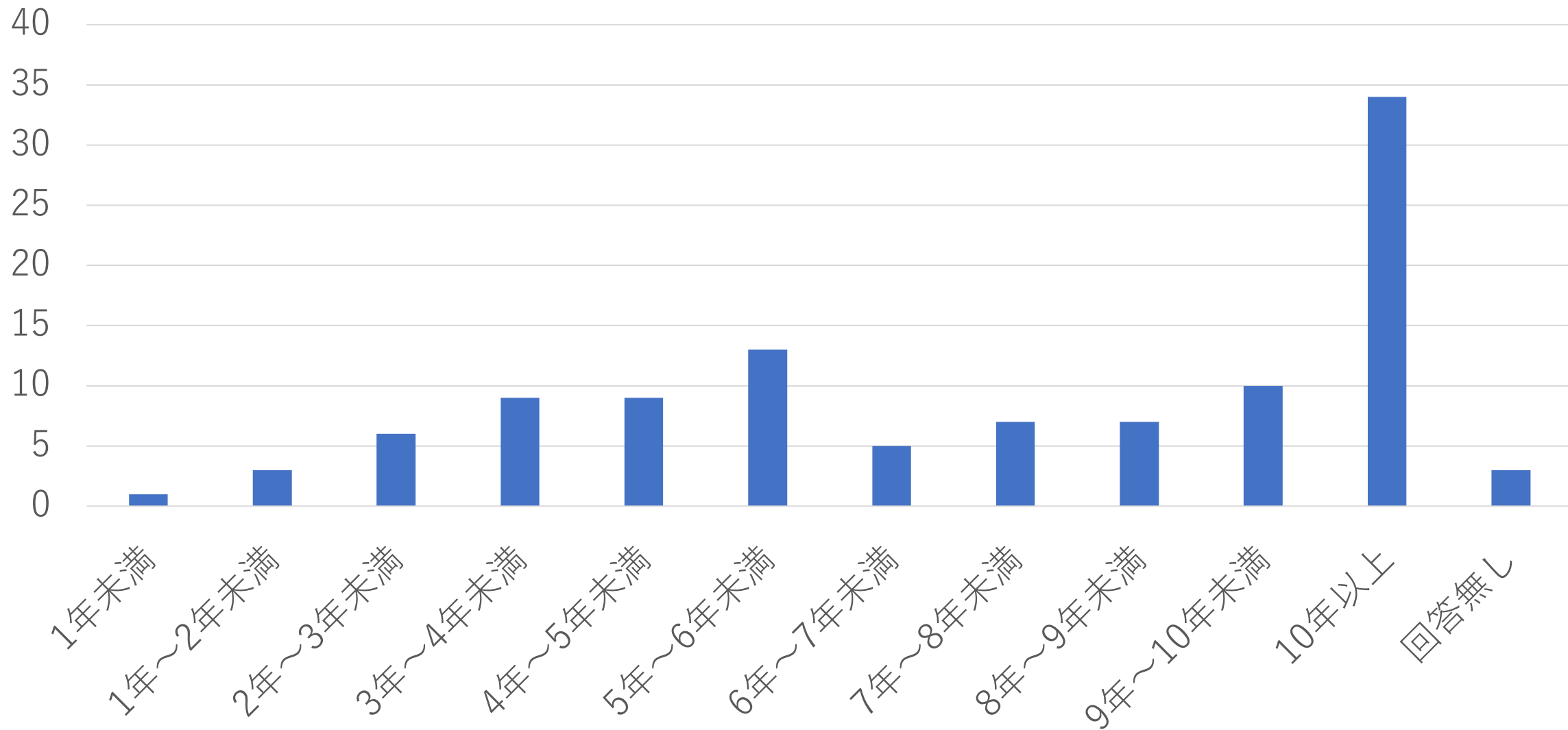


# 平均診療期間 摂食障害



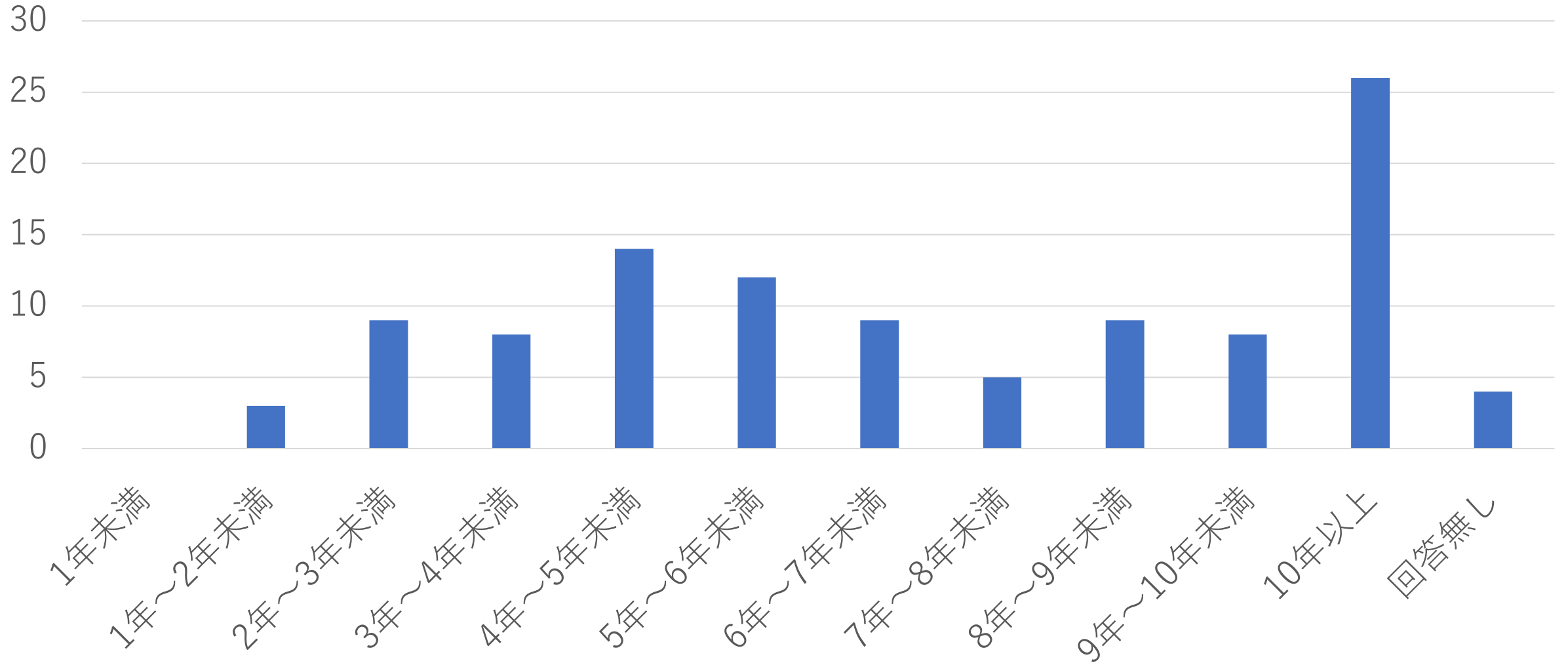


## 平均診療期間 自閉スペクトラム症

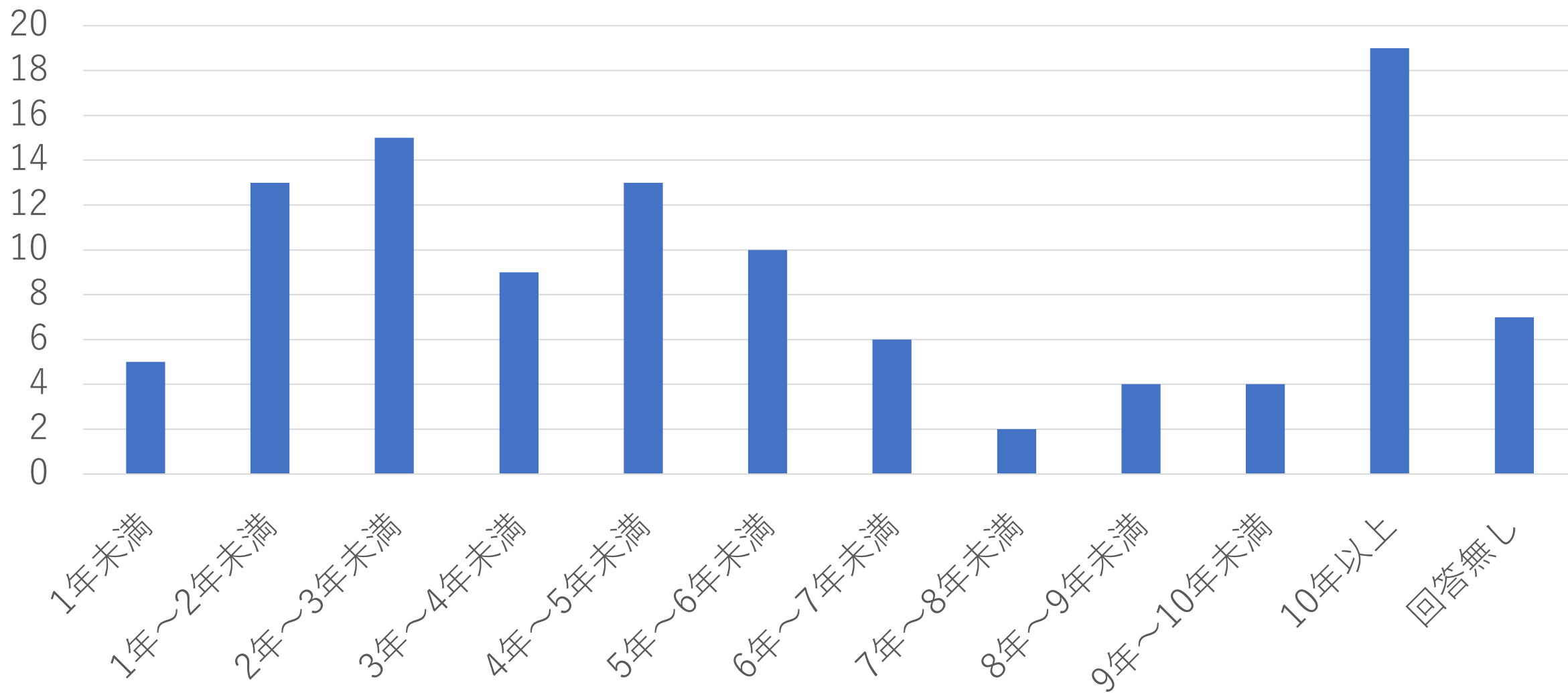


N=107

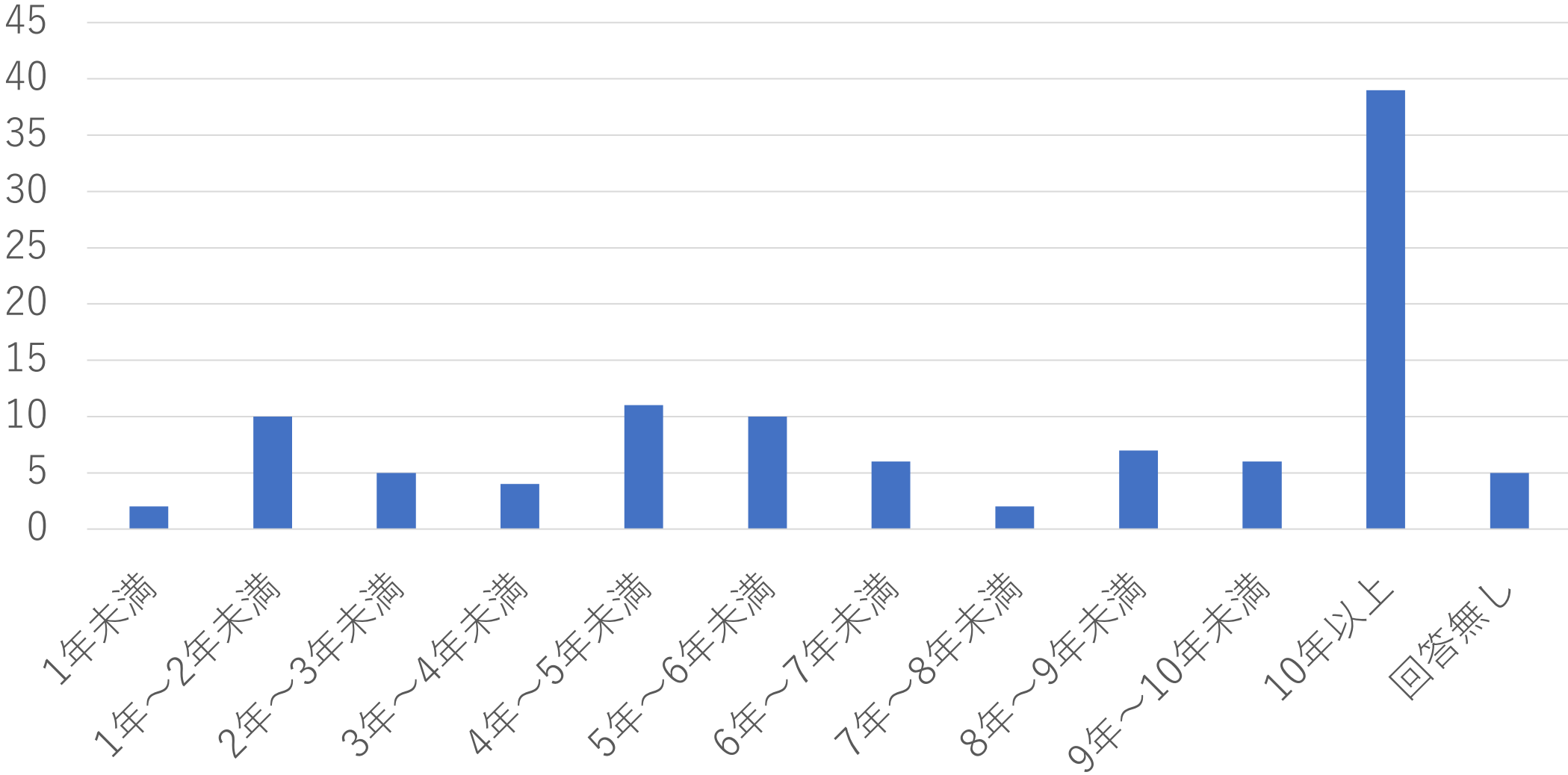
# 平均診療期間 注意欠如多動症



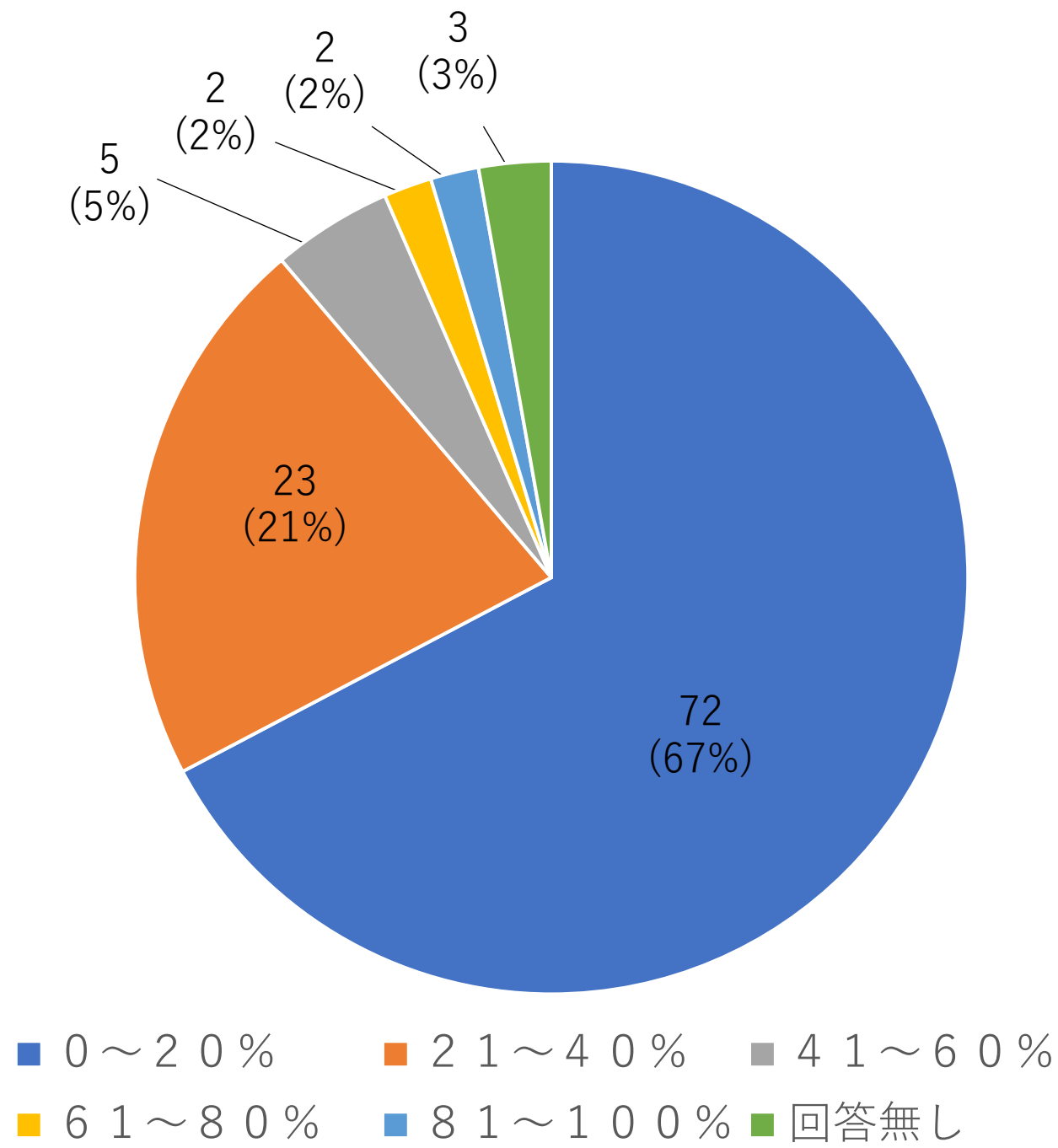
# 平均診療期間 限局性学習症



# 平均診療期間 知的発達症



# 2年間の 治療完遂率



N=107

# 考察 1

- 本検討は、日本の小児心身症及び小児精神神経疾患の指導的立場にある専門医による、80%を超える回収率の、精度の高い全国調査であり、悉皆調査と評価することができる
- 初診患者は全国的に1時間前後の診療時間が必要  
再診でも30分前後の時間を要している  
これは、一般の小児急性期疾患よりも著しく長い
- 7割弱の施設は多職種による診療支援があり、診察時間の短縮と診察可能な患者数の増加が期待できるが、現時点での体制構築は不十分である

## 考察 2

- 心身症、精神神経疾患で、2年未満で治療完遂できるという意見は非常に少なかった
- 疾患別格差は大きく、特に神経発達症(自閉スペクトラム症や知的発達症)は長期の診療期間(10年以上)を要する傾向があった
- 心身症のうち、過敏性腸症候群や起立性調節障害は比較的診療期間が短く済む傾向があったが、2年未満に治療が完遂する症例はまれであった

# 結 語

- 総括として、2年間での治療完遂率は、約70%の施設が0-20%、約90%の施設が0-40%と回答した。2年間のカウンセリング料算定期間で治療が完遂可能な症例はごく一部であることが明瞭になった
- 小児心身症・神経発達症に対する小児科での診療においては、診療期間が長期にわたることを前提にした報酬報酬体系の構築が必要である